10

# AKITA Biz Forest

## あきたBizフォレスト TOPインタビュー

# TOP INTERVIEW

**秋田県医師会**
**会長　小泉 ひろみ 氏**

昭和30(1955)年、秋田市土崎生まれ。東京女子医科大学卒業。秋田大学小児科、千葉市立海浜病院新生児科、秋田共立病院小児科、市立秋田総合病院小児科で医師のキャリアを積み、令和元(2019)年に「秋田こどもの心と発達クリニック」を開業。専門は小児科、小児神経学、児童精神医学。令和4(2022)年からは秋田県医師会長も務める。

**あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。**

## 「自ら考え行動できる人」をいかに育てるか

工藤　いつもお世話になります。本日はどうぞよろしくお願いいたします。まずはあらためて小泉先生の生い立ちからお聞かせください。

小泉　昭和30(1955)年、三人兄弟の末っ子として土崎に生まれました。家業は医者で父も母も医師でした。小学生の頃は家でじっとしているのが苦手で、ピアノ、クラシックバレエ、書道など、広く浅く習い事をしていました。中学ではバレーボールや英会話クラブ、高校では化学部にも所属しましたが、熱中して打ち込むというよりは、友人とのおしゃべりが好きで、良く言えば社交的な性格で、とにかく友達と一緒に過ごしては、毎日おしゃべりしていました。

工藤　好奇心旺盛なお子さんだったのですね。医者を志したのはいつ頃からですか？

小泉　祖父、父、兄も医者ですが、反発心からでしょうか、小学校の頃はできれば医者にはなりたくないと思っていました。祖母や母が茶道などの芸術文化系に詳しく、私もそういう道に進みたいと思いましたが、あまり上手くいかず挫折しました。また動物がとても好きでしたので、ある時は獣医を目指しましたが、結局は医者の道に進みました。高校生の頃は何者でもない自分がもどかしく、よく自己嫌悪に陥っていました。大学は東京女子医科大学に進学しました。医学部での勉強は本当に楽しくて、特に小児科や精神科などの臨床は本当に興味深い分野でした。

工藤　なるほど。ここで没頭できるものに出会うわけですね。ちなみに小児科医を選択したきっかけなどはございますか？

小泉　当時、障がい児医療研究会というサークルに所属し、障がい者福祉施設や大学病院の小児科で子どもたちと触れ合うボランティアのようなことを、週1～2回程度活動していました。女子医大の小児科は60床ありそのうち約30床は小児神経疾患の患者さんで、てんかん、脳性麻痺、寝たきりなどの子が多く、その子たちの親御さんは泊まりこみで病院に来るので、親御さんたちには一時子どもと離れてお風呂に入っていただいたり、話し相手になったり、子どもたちと遊んだりしていました。当時は私自身のメンタルにも波がありましたが、病室で子どもたちと遊んでいると心が楽になりました。私自身、ボランティアに行くというよりも、自分のメンタルが救われに行くような心持ちでした。人の役に立てている実感も強く充実していましたし、自分に向いているとも思いました。それが小児科を選んだきっかけかもしれません。

工藤　なるほど。「自分を元気づける一番良い方法は、他の誰かを元気づけてあげることだ」と言いますね。素敵ですね。では大学卒業後は本格的に医師の道に？

小泉　卒業後は、女子医大の大学病院に研修医として勤めました。その後は千葉で、新生児科に勤務しました。その後秋田に戻り、市立秋田総合病院の勤務医として約27年間勤務しました。専門は、現在は小児科と児童精神科です。総合病院に勤めながら医師会の活動にも関わり、感染症、ワクチン、乳児検診、児童虐待といった分野などを担当しました。

工藤　現在、小泉先生は「秋田こどもの心と発達クリニック」を経営されていますが、私が子どもの頃は、子どもの心や発達に特化したクリニックは身近に無かったように思います。近年、精神やメンタル面で悩む子どもたちも増えているように感じますがいかがでしょう？

小泉　そうですね。昔に比べ子どもたちの様々な疾患が増えました。特に心の病は年々増加傾向です。日本では同調圧力や「こうあるべき」や「～すべき」といった強迫観念が特に強い傾向にありますが、子どもたちにとっては、その枠の中に納まることが苦しい場合も多いです。必ずしも大多数側に身を置く必要は無く、その点から言えば、個性を認め合える社会になることが理想だと思っています。また、相手を敬う心も大切だと感じます。子どもは未来の宝です。だからこそ「自ら考え行動できる子ども」をいかに育てるかは、大人の使命なのではないかと思っています。

工藤　なるほど、部下も子どもも、手を差し伸べすぎると考えなくなりますよね。それは上司や親のせい。私も一児の父ですが「親という漢字は“木の上に立って見る”と書く、木の上に立って見守ることが基本だ」と教わり、腑に落ち心がけています。「自ら考え行動できる力」大切ですね。話は変わりますが、秋田県医師会として、現在課題などはございますか？

小泉　地域の医療崩壊を生まないような医療構造づくりは喫緊の課題です。ご存じの通り秋田県は全国的にも特に人口減少率が高く、出生数も令和4年で3,992人と4,000人を切りました。人口減少が進むと、当然地域の外来数や入院患者数も減り、病院の経営が厳しくなりますので、地域の病院が減少し地域医療が崩壊するという構図が生まれます。また、医師の高齢化、減少、偏在も課題です。秋田県の二次医療圏についても、人口減少が進む中で現状の8医療圏を維持するのが難しいとして、令和6年度から、これまでの8つから3つになりました。例えば秋田市で例えると、どこの地域でも耳鼻科や内科などがおおよそ幅広く揃っている状態ですが、人口減少社会においては、商業的にみると患者さんの奪い合いのような形が生じてしまいます。これはあまり良い状態とはいえません。すでに過疎化の深刻な秋田県の多くの地域では、地域全体で役割分担をし、連携して患者さんを診る「地域完結型」を目指していく医療圏の構築が必要です。秋田市も決して例外ではなく、さほど遠くない未来にそういった現実がやってきますので、医療崩壊を防ぐために、地域に対する円滑な医療インフラの提供、病院経営の安定、医師の技術向上など、そういった地域完結型の医療圏づくりをしっかり再編し構築しなくてはなりません。

工藤　なるほど。特に秋田県は少子高齢化の先進県なので、医療モデルが構築できれば他地域のさきがけにもなりますね。さて、医療の側面から秋田においてビジネスのポテンシャルに感じていることなどはございますか？

小泉　秋田に限った話ではないかもしれませんが、医療分野の技術や見識を、他分野で活かすことができれば大きなビジネスチャンスが生まれるように思います。やや資本の投資額は大きいかもしれませんが、産学官連携や行政の支援等があれば実現の可能性も十分にあると見込めます。医療業界における技術、知見、ビッグデータや各種エビデンスを、もっともっと日常分野にも応用するような活かし方ができれば、日常生活の課題解決につながったり、より豊かな生活環境に繋げたりできるとも思います。

## ロックコンサートは至福の時間

純粋なオフの時間は少ないそうですが、昔から音楽を聴くのが好きだという小泉さん。最近はクラシックを聴くことが多いですが、本当はロックが一番好きだと目を輝かせる小泉さん。キッスやエアロスミス、クイーン、ミック・ジャガーやガンズ・アンド・ローゼスもよく聴かれ、昔からロックアーティストのコンサートに直接足を運ぶのが好きとのこと。意外なロックな一面を知ることができました!!!

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増（ございま）した。


インタビュー
合同会社ジェグルス（共同事業体ジェイワン）アントレプレナーコンシェルジュ　工藤　実

ライター　株式会社せん　磯部春香
企　画　共同事業体ジェイワン（秋田市ビジネススタートアップ支援事業）